岩手大学教育学部研究年報　第63巻（2004. 2）157～176.

日本におけるライアーの導入と広がり

島　崎　篤　子*

（2003年10月7日受理）

はじめに

2001年の7月に宮崎駿監督によるスタジオ・ジブリ制作のアニメーション映画『千と千尋の神隠し』が公開された。この作品は2002年のベルリン国際映画祭グランプリ（金熊賞）の受賞を皮切りに全米で様々な賞を獲得し，2003年には長編アニメ部門での第75回アカデミー賞受賞という快挙を成し遂げた作品である。この映画のエンディング・テーマを木村弓がライアー（Leier 竪琴）を使ってシンプルな伴奏で歌ったのを契機に，ルドルフ・シュタイナー（Rudolf Steiner 1861～1925）の哲学を尊重する者の間で宝のように大切にされてきた地味な楽器ライアーが音楽シーンの表舞台に躍り出るという予想もしなかった状況が起こった。77年前の1926年に誕生した新しい楽器ライアーが日本に導入されてから，まださほど年月を経ていない時期に突然起こった一種のブームに似た現象は，主にシュタイナー教育や音楽療法の世界で静かにその熟成を待っていた日本のライアー状況を少なからず変化させることになった。

はからずも2003年はイラク戦争を初めとして世界情勢が不穏に揺れる中，アメリカで第2回ライアー国際大会が開催された。「東京ライアーアンサンブル」のメンバーである筆者は，本大会に参加し，世界のライアー仲間から多くの刺激を得ることができた。この大会への参加を機に，ライアー導入からの年月が浅いにもかかわらず，既に不明瞭になってしまっている日本におけるライアー導入期の様子やその後の広がりについて，可能な限りその軌跡をたどり，かつライアーの国際大会についても記憶に新しいうちに振り返っておきたいと考えた。

したがって本稿は，歴史的な視点から日本におけるライアーの導入や広がり，およびライアーの国際大会という事実を中心に論じることが目的であり，ライアーの根源に存在するシュタイナーの哲学や音楽論などについて語ることを目的とするものではない。

1　ライアーという楽器

(1) ライアーの誕生と広がり

ライアー（leier）は，一般的に「竪琴」を意味するドイツ語である。ライアーの原型といわれているリラ（lyre）やキタラ（kithara）は古代ギリシアに見ることができるが，その起源はさらに歴史をさかのぼり紀元前5000年前のシュメールの出土品に見ることができる[1]。

ルドルフ・シュタイナーの思想の影響を受けた音楽家エドムント・プラハト（Edmund Pracht）

＊　岩手大学教育学部

と彫刻家ローター・ゲルトナー（Lothar Gärtner）が1926年に新しい楽器ライアーの第1号を誕生させて以来，次第に年月を重ねながらライアーはこの系列の楽器の固有名詞としても定着してきた。

シュタイナーの思想を表すのに，アントロポゾフィー（Anthroposophie）という言葉が使われている。この言葉は，ギリシア語で「人間」を表すアントロポスとソフィアをつなげたものである。ソフィアとは古代ギリシア思想で尊重された最高の知恵を意味する「叡智」を表しており，日本語ではこのアントロポゾフィーを人智学と呼んでいる。したがってシュタイナーの思想に影響されて誕生したライアーには人智学が反映されているのである。ライアー誕生の前年の1925年3月に没したシュタイナーは実際にライアーを見ることはできなかったが，自らの著書『音楽の本質と人間の音体験』の中で，既に彼は理想とする楽器を示唆していた。

すなわち「土星，木星，火星，金星，水星という五つの星が人間という木に下り，その木に竪琴の弦を張った。こうして人間は楽器になった。その上を，この楽器の調律者である不死鳥，つまり人間の魂が宿っている」[2] と語り，人間と音楽の不分離な関係を語る中で人間を木になぞらえて，暗に弦楽器を匂わせていた。

またシュタイナーは，ピアノは物質世界で音楽を表現できる便利な楽器と認めながらも厳しい言葉を残している。すなわち「ピアノは内に，高次の人間を有していません。ピアノは俗物楽器です」と述べながら，「ピアノは音楽的に克服されなければならない楽器なのです。音楽を体験しようとするなら，ピアノの印象から脱しなければなりません」[3] とまで語っていた。

プラハトはスイスのバーゼル郊外のアーレムハイムにある治療教育の施設ゾンネンハイムで子供のオイリュトミーの音楽を担当していた。オイリュトミーはシュタイナーが生み出した動きの芸術であり，動きによって本来は目に見えない言葉や音楽を視覚化する独自の身体芸術なのである[4]。プラハトはオイリュトミーの指導の際にピアノを使っていた。しかしオイリュトミーにピアノの音色は最適ではないという印象をもっていた彼は，シュタイナーの講義を聞いて以来，より一層オイリュトミーにふさわしい新しい楽器を求めて多くの楽器製作者と相談を始めた。そして最終的にゲーテアヌムで働いていた彫刻家ローター・ゲルトナーと共に試行錯誤の末，最初のライアーを生み出したのである[5]。

プラハトがゾンネンハイムでライアーを弾いた時，子供たちの反応はピアノを使った時とは全く違っていた。以後，治療教育にライアーが使われ1938年にゲルトナーがライアーづくりのマイスターの称号を得てから今日に至るまで，ライアーの種類は増えこそすれ，ライアーづくりが途絶えたことはない。ライアーは次第に他の施設に広がっていき，治療教育以外の演奏活動にも使われるようになってきたのである[6]。シュタイナーは，「発育不全の子どもたちに起こるすべては，もっと内密な仕方ではあっても，健常と思われている魂のいとなみの中にも見られる」[7] と考え，全ての教育において魂のいとなみの観察を重視した。すなわちシュタイナー教育の核心部分には障害をもった人々への眼差しがあり[8]，現在世界中に広がっている健常者と障害をもつ人々との共同体キャンプヒルは，シュタイナーが示唆した未来社会への1つの展望でもある。そしてこのキャンプヒルにおいてもライアーは活躍している。

ライアーはその由来から見ても，いわゆるコンサート用の楽器として誕生したものではなく，治療教育との結びつきを無視して語ることのできない独特の性格をもった楽器といえるのである。

(2) ライアーの種類

弦鳴楽器には，楽弓族，リラ族，ハープ族，リュート族，チター族の5つの基本型がある。この分類に従うとライアーはリラ族であり，ハープとは弦の張り方が違う。すなわちリラ族の弦は共鳴胴から2つの腕によって支えられた横棒まで張られるが，ハープ族の弦は共鳴胴からネック（棹）まで斜めに張られている。さらにカンテレのようなチター族の楽器の場合は，弦が共鳴胴の上に胴と平行に張られているのである[9]。

シュタイナー教育では，幼児や小学校低学年の子供のためにライアーではなくキンダー・ハープという共鳴胴のない共鳴板に7本の弦（d'e'g'a'h'd"e"）を張っただけの楽器が使われる。内的な世界がまだ未成熟な段階の9歳位までの子供には，長調・短調が明確な音楽よりも，より大きなインターバルの5度の雰囲気の音楽世界がふさわしいと考えられているからである。

このキンダー・ハープに比べるとライアーは数多くの弦が張られており，共鳴胴のブリッジの上を幹音が並び，ブリッジ中央の穴を通って派生音が並んでいる。演奏者は，楽器を膝の上に垂直にのせて前後左右のバランスを取りながら段差のある幹音と派生音を両手の指で撫でるように弾奏する。

プラハトとゲルトナーによって誕生したライアーは，曲線のみの少し歪んだ縦型の楕円型をしているものが標準タイプであるが，ゲルトナーの他にも次第にライアー製作者やその工房が出現し，現在では形も音色もバラエティーに富んだ新しいライアーが誕生している。

最も一般的なゲルトナーのソプラノ・ライアーは35弦（e〜d'''）であり，アルト・ライアーは38弦（E〜f''）である。この他にも46弦のテノーラー（C〜a''）などがある。ゲルトナーの工房から独立したホルスト・ニーダーのザーレム・ライアーはゲルトナー・ライアーを少々横に太らせたような形である。

ゲルトナーやザーレム同様に広いシェアをもつコロイのライアーには，同じ弦数のソプラノやアルト・ライアーの他にも，27弦のスモール・ソプラノ・ライアー（g〜d'''）や39弦のソロ・ライアー（c〜d'''）などがある。またチター族の仲間といった方がいい箱形のボルドゥン・ライアーやハープ族の54弦のハープ・ライアー（A〜d'''）などもある。

これらの中でボルドゥン・ライアーは，メロディーを演奏する楽器ではなく和音を奏でる楽器である。1つの楽器を1つのコードに調弦するため，3コード必要な時は3つのライアーを使用することになる。グリッサンドだけで十分心安らぐ清澄な音色を響かせてくれるボルドゥン・ライアーは治療教育の場面で効果的に活用されている。

最近ではゲルトナー，コロイ，ザーレムのライアー，そして彫刻作品のようなアンドレ・レーマンのライアーなどのドイツの製作者によるもの以外に，イギリスのジョン・ブライヤンのライアーや北アイルランドのケルティック・ライアー，チェコのアントン・ライアーやオーストラリアのティアドロップと呼ばれる涙型のライアーなど，様々なライアーが登場している。

日本では1986年から日本で最初のライアー輸入元として東京アンゲルスムーシカを設立し，日本におけるライアーの普及に努めてきた泉本幸一が，1998年に日本初のソプラノ・ライアー（35弦）を製作した。その後，1999年にはアルト・ライアー（38弦）の製作にも成功し，泉本は2003年4月までに既に5台の自作のライアーを誕生させた。泉本の場合は販売目的ではなく，よりよい音の追究というコンセプトによる試作を重ねているため，今後も彼が製作したライアーが数多く市場に出回る状況は生まれにくいであろう。しかし日本初のライアー製作者として泉本幸一の名をここに記しておきたい[10]。

ところでライアーの材料には，キンダー・ハープも含めて，楓，エゾ松，楡，トネリコ，桜，白樺など様々な種類の木が使われている。ゲルトナーのライアーの場合は，色目の関係でまれに白樺が使われることもあるが，そのほとんどがバイオリンなどの弦楽器で使われる楓，エゾ松である。既にキンダー・ハープに使われる楡の木は絶滅状態に近くなってきており，楡の木を使ったライアーは，次第に貴重な楽器になりそうである。

2 日本におけるライアーの紹介と導入

(1) 著書によるライアーの紹介

シュタイナー教育においてライアーという竪琴が使われているという日本で最初の情報は，子安美知子著の『魂の発見――シュタイナー学校の芸術教育――』[11] で紹介されたものだった。1981 年刊行の同書には，ライアーに関する詳細な記述が見られる。

この著書の中で子安の娘フミが通うヴァルドルフ学校（シュタイナー学校）の 1 年生の組で，ユング先生がライアーを羽根琴ともいって紹介している d'e'g'a'h'd"e"g"a"h" のペンタトニックに調弦されている楽器である。前述したようにシュタイナー教育では，ペンタトニックは初めと終わりの完結性をもつ長調や短調の世界とは違って上下に開かれており，9 歳までの子供の内面と呼応する 5 度の気分を表現できるものと考えられているのである。ユング先生は子安に「ライアーの教育楽器としての第一の使命は，聞く人にも，またひくひと自身にも“聞き耳を立てる”ことを教えることなのです」[12] と語っている。

作曲家の一柳慧は，子安美知子が 1975 年シュタイナー教育を日本に紹介した著書『ミュンヘンの小学生』[13] に刺激を受け，1976 年に約半年間家族同伴で西ベルリン市に滞在した時，当時 6 年生だった息子をヴァルドルフ学校に入れ，そこで「ハープを横に寝かせたようなかたち」[14] の楽器に出会っている。そこでも先生が一柳に次のように述べていた。

「現代のような騒音の激しい時代に生まれた子供たちにとって大事なことは，小さな音を聴くことではないでしょうか。私たちは子供たちにこの楽器を学ばせることによって，音に対する集中心を養わさせるのです。音に敏感になった子供は自然に繊細な感受性を身に付けます。そしてそれは音を大切にする気持ちにつながってゆくのです。」[15]

一柳はこの体験から「今日の音楽は，『音を聴く』というもっとも本質的な音へのかかわり方から遠く距たったものになってしまっている」[16] と社会と音の問題にも言及している。

しかし一柳がこのことを書いた「音を聴く」という文章を最初に発表したのは 1982 年の『美の再定義』（岩波書店）であり，本論と同名のタイトルをつけた一柳の著書『音を聴く』が刊行されたのが 1984 年である。したがって子安と一柳の両者共に，1970 年代の後半にはシュタイナー学校でライアーに出会う体験をしているものの，ライアーが文章の形で日本に紹介されたのは 1980 年代になってからであった。

ところで子安，一柳両者が写真で紹介している 10 弦のライアーとは，その形状からゲルトナーのフリューゲル・カンテレ（Flügel-Kantele）と判断できる。共鳴胴の上に平行に弦を張るチター族の楽器カンテレの一種であり，キンダー・ハープとも違う種類の楽器である。シュタイナー教育では成長にともなってキンダー・ハープやフリューゲル・カンテレなどから派生音付きライアーを演奏するようになるため，全てライアーと総称することもあるようである。

いずれにしてもシュタイナー教育が重視している〈音を聴く〉こと，すなわち耳の回復とい

う課題は，1980年代から日本の音楽教育に新しい風を運んできた創造的な音楽学習でも重視している課題であるが，シュタイナー教育における音楽教育で最も注目すべ視点なのである。

(2) 楽器ライアーの日本上陸

子安美知子が1975年シュタイナー教育を日本に紹介した『ミュンヘンの小学生』と同じ時期に，現在もシュタイナーの著書を精力的に訳出している哲学者で元慶應義塾大学教授の高橋巌と当時彼の妻だった高橋弘子によってシュタイナーにかかわる精力的な活動が行われていた。現在においても高橋巌は講演会や研究会を中心に活動し，高橋弘子は専門の幼児教育の部門で活躍しているが，聡明な2人による当時のシュタイナー紹介の活動は日本におけるシュタイナー哲学や教育の定着を大きく推進させた。1976年にドイツ留学から戻った高橋巌は，1977年から1980年にかけて日本各地で国際教育文化交流協会主催のシュタイナー人智学講演会を行った[17]。1981年の1月からは，東京と京都で巌・弘子両者企画で教育に焦点化したルドルフ・シュタイナー教育講座がスタートした。人智学一般から教育への焦点化について，当時から高橋の講座の企画運営を担当していた二瓶繁は，当時，人智学講演会を行うと変わった人ばかりが集まってしまうので，教育に焦点を絞った方が良いと思ったと筆者に語ってくれた[18]。

1977年8月からはルドルフ・シュタイナー教育海外ゼミナールもスタートしている。この教育海外ゼミナールは2001年までに実に24回を数えている。1980年の海外ゼミナールに参加した1人だった川杉啓子は，『シュタイナー幼児教育手帖』というシュタイナー系の幼児教育の雑誌に「私の育児日誌」を数回連載していたが，その中で彼女の夫が前年の1979年に海外ゼミナールに感動して，彼女に翌年1980年の参加を勧めたと書いている。このゼミナールの中ではライアーの演奏を聴く機会も設定されており，ライアーの購入も可能だったようである。この時，企画者側として同行した高橋弘子は，帰国後の1980年12月にゲルトナーに宛てた手紙でフリューゲル・カンテレと27弦のソプラノ・ライアーを注文している[19]。

しかしドイツから直接日本にライアーが持ち込まれたのは，1981年の夏であった。教育講座が開始された1981年の8月の夏の特別講座に特別講師としてドイツの治療教育家であり音楽家でもあるフィント・アイゼンを招聘している。この時に，彼はゲルトナーではなくザーレムのライアーを80台使って音楽教育実習を行った。実習後，これを講座企画者の高橋や二瓶に販売委託して帰国した。最近は木村弓の影響を受け年間販売台数を増やしているものの，通常は年間20から30台のライアーを販売するのも容易ではない楽器である。当時，80台も請け負った二瓶はこれを売り尽くすのに3年かかったという。早くも1981年には，既に日本に少なくとも80台のライアーが上陸していたのである。これが日本で最初のライアーの上陸であった。

また1982年と1983年の春の特別講座にはベルリンのトーマスハウスでライアーを使って音楽療法を行っているアルバート・ベーゼを講師として招聘している。筆者が入手できた1982年の第8回と1983年の第10回ルドルフ・シュタイナー教育ゼミナールの案内用チラシには，「ライアー，笛（コロイ），打楽器など」を使うことが記載されており，特に第8回の案内には，「シュタイナー幼稚園・学校『魂の保護を必要とする子どもたち』の施設における音楽教育・音楽治療教育に欠くことができない『ライアー』という新しい楽器を紹介します」という一文が書かれている[20]。因みに第10回のチラシにはコロイ製の新しい楽器を紹介することが書かれているが，ライアーについては直接書かれていない。したがって日本における1982年のルドルフ・シュタイナー教育ゼミナールでは，ベーゼによって初めてコロイのライアーが持ち込まれ紹介されたのである[21]。

以上のように1970年代末には海外で直接ライアーを入手した日本人がいる可能性がある一方，日本においては，フィント・アイゼンやアルバート・ベーゼによってライアーが紹介され，1980年台の初めには少なくとも80台以上のライアーの現物が国内に流入していたのである。

(3) 中込晃の活動

1980年代には，ライアーに魅せられた中込晃の活動があった。当時，彼の知人から，中込晃はライアーを学ぶためにドイツに行き，帰国後，ライアーの指導をしていたが間もなく逝去したという情報だけは把握していた。筆者が中込に直接出会ったのは，彼がドイツから帰国して間もない1986年頃であった。全国国立大学附属学校連盟の音楽科研究会にぜひライアーを参加者に紹介したいと楽器を持ち込んだのが中込だった。大会ではライアー・コーナーが設けられ，休憩時間などに中込が参加者に自由にライアーを紹介していた。また中込の演奏を聴く機会も設定されていた。彼の演奏に共感できなかった筆者はライアーに触れてみたものの，この時は，後年，自分が演奏する楽器としてライアーを選択することになるとは夢想だにしなかった。

2001年の夏にミュンヘンにおいて筆者が師事しているライアー奏者のスザンネ・ハインツから中込晃の作品が紹介された。この時彼の作品を演奏することによって，初めて木訥で不器用だった彼がライアーの魅力を伝えるために自らライアーのための作曲に取り組み，帰国後は幼稚園などでライアーの講習会を開いていた努力が貴重な歴史的事実であることを認識し，ライアー導入期の中込の功績を伝えたいという衝動に駆られたのである。生涯独身を通して彼が逝ってしまってから既に10数年の歳月が流れ，中込晃の名前が誰の言の葉にもかからなくなった今，中込の活動を探るのはきわめて難しい。唯一彼自身の言葉が残されているのは，亡くなる直前に自らのドイツ体験を音楽教育雑誌に12回にわたって書き綴った連載である。そしてハインツが紹介してくれたたった1冊の彼の作品集である。すなわち彼の没後，ドイツのライアーの機関誌の楽譜集として1996年に彼の作品集が発行された。楽譜の「前書き」には彼がライアーを学んだアルバート・ベーゼが次のように中込を紹介している[22]。

> 私と中込晃が知り合ったのは，彼がちょうど教職を離れた時だった。彼は東京で音楽教師をしていたが，高橋夫妻の元でアントロポゾフィーを知るようになり，ライアーを学ぼうと考えた。そのため彼は60歳近くになってから1982年に初めてドイツ語を学ぶためにドイツにやって来たのだ。1年後に彼はライアーに取り組むようになり，ライアーを学ぶためにベルリンにやって来てからは私と彼はより一層親しくなった。ここの2年間で彼はますますドイツ語に磨きをかけ，同時に演奏のためのライアーにも力を入れた。その後，彼は2・3の自由音楽学校（Freien Musik Schule）の機関を訪れる機会をもった。
>
> ベルリン滞在時の初めの頃に，彼は既に同じ時期に「2つの日本の子守歌」の編曲と「ソロ・ライアーのためのソナチネ」の作曲を終えていた。彼はフランクフルト滞在中に，「3つのライアーのためのソナチネ」を作曲した。日本に帰国した後，彼は間もなく重度の糖尿病をわずらったために，さらに経験を積むにはもう短い時間しか残されていなかった。彼の親族は音楽の遺品を焼いてしまった。その結果，ここに掲載する3つの作品だけが，ベルリンにコピーが置いてあったため出版できる運びとなった。（島崎訳）

短文だが中込に関する唯一の貴重な紹介文である。しかしこの紹介文には2カ所疑問点があ

る。当時の彼を良く知っている二瓶繁は，中込は自分よりも3歳年下であり，生きていれば2003年に70歳になると述べている。また中込は呼吸困難を起こすほどの重度の蓄膿症を持病にもっており，死因についても糖尿病だけであったか否か疑わしいとも述べている[23]。これが事実だとすると1982年にドイツにわたった時，彼はまだ49歳だったことになる。死因についても疑問が残る。いずれにしても長年，小・中学校の音楽教師をしていた中込が，アントロポゾフィーに傾倒して，仕事を辞めてまでドイツに行き，念願の楽器ライアーに挑戦した生き方は感動的であり，彼のドイツ体験報告からもライアーへの強烈な情熱が伝わってくる。

中込が書いた連載は，『教育音楽中学・高校版』1986年4月号から1987年3月号の12回にわたって「はるかなるソフィアの音楽ふたたび～ドイツ・ヴァルドルフ学校の音楽教育を訪ねて～」と題するエッセイ風に書かれた報告である[24]。まだドイツが東西に分かれていた頃，中込は西ベルリンに住むベーゼにライアーを学んだ後，自由音楽学校のいくつかの機関を訪れて学んだ体験を生き生きと描いている。自由音楽学校とは，建物としての学校があるのではなく，学ぶ者自身がドイツに点在するシュタイナー関係の学校・施設・音楽家を自ら訪問して学ぶ学校のことである。なお1982年に渡独した中込はその年の8月に開催された高橋弘子らによる第11回ルドルフ・シュタイナー海外ゼミナールにドイツ在住者として参加していた[25]。82年はドイツ語を学び，翌83年にはベーゼからライアーを学んだ後，連載によると84年から85年にかけて彼は次のような意欲的な体験を重ねていた。

〈1984年〉

●フランクフルトの近くにあるヴィンゲンハイムという子どもの治療施設におけるクリスマス音楽会でライアーの合奏とコーラスの演奏を鑑賞する。彼はここで子どもたちが歌う発声法がシュタイナー系の透明な響きのヴェルベック（Werbeck）発声であることに気づき，かつ深く感動している。

●フランクフルトからボーデン湖畔の町ザーレンに行く。これは彼が自分のライアー（ザーレム・ライアー）の共鳴胴に入ったひびを修理するために直接ライアー製作者に会って，ライアー製作の様子を自分の目で確かめたいと思ったためである。またザーレンの隣町ユーバリンゲンのヴァルドルフ学校（シュタイナー学校）の教師で日本に初めてライアーを紹介したフィント・アイゼン先生と会う。

〈1985年〉

●フランクフルトのヴァルドルフ学校で教鞭をとっている藤田恵子の紹介によって，中込はこのヴァルドルフ学校の教師ビュディンゲン先生のもとで1月から3月までの3ヶ月間音楽教育の実践を学ぶ機会を得る。ここでの3ヶ月はライアー中心の生活だった。月曜日以外は全て予定が決まっていたようである。すなわち火曜日は保護者とのライアー合奏，日，水・金曜日は自由音楽学校の研修日として先生と一緒にライアーの重奏やシュタイナーの音楽理論を学ぶ，木曜日は教官会議，土曜日は先生と仲間でライアーの重奏練習というようなライアー漬けの暮らしをしていた。

●4月以降はボーデン湖畔のユーバリンゲンにあるバンベルゲンのヴァルドルフ学校でフィント・アイゼン先生の教育実習を受ける。4月23日から4月一杯はフィント・アイゼン先生による3年生のエポック授業を参観している。またこの時，日本の曲「さくら」を教えている。

●5月になると中込はオムリン先生が担当する7年生（日本の中学1年生の該当）のクラスに配属されている。この時は，「お江戸日本橋」「五木の子守歌」の2曲をオムリン学級の子ども

たちに教えている。またフィント・アイゼン先生からはシュタイナーの音楽教育論を学んだり，ショーリエス先生の11年生（日本の高校2年生に該当）の授業参観なども行っていた。連載ではこの時学んだ「シュタイナー音楽教育の基本概念」を2回にわたって紹介している。

• シュツットガルトのヴァルドルフ学校で教鞭をとっているキリアン先生を訪れる。この時にちょうど開催されていたシュタイナー教員養成所の音楽教師の研究会に出席している。またキリアン先生が指導する子どものオーケストラの素晴らしさに感動しながら，どこのヴァルドルフ学校でもオーケストラの指導を重視していることを報告している。

• 6月になるとユーバリンゲンのバンベルゲンの町に戻ってすぐに，城壁に囲まれた町ヴァンゲンにあるヴァルドルフ学校を訪れた。ここで音楽の指導をしているニーセン先生の授業参観が目的であった。朝の授業を7年生と共に体験し，また他の学年の音楽の授業も参観している。7年生の授業では日本の曲「かごめかごめ」を遊び付きで紹介し，中込はライアーで伴奏した。

ここでの体験を最後に，7月には日本に帰国した。中込自身の連載によると彼の行動は以上のようなものだった。もっともこのように足取りだけをたどると何とも無味乾燥になってしまうが，彼の連載はそれぞれの町での人々との出会いやヴァルドルフ学校で学んだことなどが豊かに綴られている。帰国後，彼は幼稚園教師やライアーに関心のある人々にライアーを指導しながら，1986年4月から1987年3月にかけてここで紹介した連載を書き綴った。

この当時の中込を知る坂田ゆかりの話によると[26]，彼は京都の夢窓幼稚園に1ヶ月に2・3回の割合でライアーの指導に来ていたという。幼稚園の先生方が中心だったため，ここでは小型のライアーを使って主に即興的な遊びを行っていた。雑誌の連載を終えてライアー関係の活動を行っていた彼は1987年にこの夢窓幼稚園で倒れ，その後，一旦回復したものの，間もなく逝去されたという。正確な没年月日を確認することはできなかったが，帰国後，約2年程度の人生しか残されていなかったことを考えると日本におけるライアーの指導とその精神の普及という志半ばで逝った彼の無念さが伝わってくるようである。

3 ライアーの広がり

(1) 日本における初めてのライアーのアンサンブルグループ

1986年に東京アンゲルスムーシカを設立してライアーの販売やメンテナンスの仕事を行っている泉本幸一が日本初のライアー製作に成功したことについては前述した。音楽を専門とする泉本幸一の妻，泉本信子は，1986年12月までに自らの編著でライアー演奏の導入用テキスト『Leier ライアの本』[27]（非売品）をまとめた。さらにドイツから楽器を導入してもそれを正しく演奏する方法を普及しなければ楽器を導入する意味はないと考えた泉本信子は，まずはこの導入本の練習を中心とする「ライアをひく会」を発足させた。かくして第1回「ライアをひく会」は，1987年2月，東京阿佐ヶ谷にある阿佐ヶ谷地域区民センターで開催された[28]。5・6名の小さな会としてスタートしたこの会は，発足以来第10回目の練習日にあたる1987年の暮れの12月20日には，メンバーも10人以上に増え，初めての発表会を兼ねた「クリスマスコンサート」を行うことができる程度に成長した。またこの頃には簡単なライアーのオリジナル曲のアンサンブル演奏もできるようになっていた。奇しくも1987年は中込が病に倒れた年である。以後，泉本信子が今日に至るまで中込に代わって日本のライアー音楽の普及と指導の中心的人物として貢献することになる。泉本は1988年にスザンネ・ハインツ[29]，また1990年には

藤田恵子[30]に師事し，1991年と1992年にはドイツから帰省した藤田恵子を講師として講演会やワークショップを実施した。またこの頃から泉本はドイツ語を学び，かつ隔年から毎年へと次第にドイツ行きの回数も増え，ライアーを学びつつシュタイナーの音楽理論についても深めていった。

泉本主宰の「ライアをひく会」は，1988年に「ライアの会」[31]と改称し，1987年から1995年までに10回のコンサートを重ねた。さらに1998年には「東京ライアーアンサンブル」に改称して旗揚げ公演を行い，2003年10月には改称以来3回目のコンサートを迎えた。

泉本はより幅広い立場で日本のライアー活動を推進するために，また自らの演奏活動に集中するために，2000年の旗揚げコンサートを最後に長年主宰していた「東京ライアーアンサンブル」を退会した。しかし第10回を迎える頃には，次第にメンバーの中には招待演奏会や2・3人によるコンサート活動などを行う者も出てきた。とりわけ泉本はドイツのライアー奏者や日本の作曲家など様々な音楽家と組んで精力的にコンサート活動に取り組むようになった。現在までのところ日本国内でドイツのライアー奏者とのトリオやデュオのコンサートを行っているのは泉本だけである[32]。

一方，10年以上も共にライアーを演奏してきた「東京ライアーアンサンブル」のメンバーは，泉本の脱会後もライアーのアンサンブルグループを発展的に継承し，現在も日本で最も古いライアーアンサンブルのグループとしてコンサート活動を継続している。泉本の蒔いた種子が自力で花を咲かせ始めたといえるであろう。

(2) 日本とドイツにおける研修や著書

「ライアの会」の質的向上をめざしていた泉本はドイツ在住のライアーの師スザンネ・ハインツの協力を得て，1996年8月1日から7日にかけて「東京ライアの会」と「横浜ライアの会」を対象として，ミュンヘンにおける日本人のための海外ライアー研修会を企画した。これには両者の会の全メンバーが参加し，かつドイツ在住のライアー奏者たちも加わり講師も含めて総勢24名の研修会となった。この研修会において参加者は，直接，ユリウス・クニイーリム（Dr. Julius Knierim）からライアーによる即興演奏や彼の作品の指導を受けることができた。

1961年にライアーを生み出したプラハトが病の床にあった時に，プラハトのもとにライアーの演奏家たちが集合した。プラハトが死を前にしてライアーの発展という自らの使命を彼らに委託した時，その中心的責任を負った人物がクニイーリム博士である[33]。その後1975年にはスイスのドルナッハにおいてライア演奏のための会議がもたれ自由音楽学校が設立している。つまりクニイーリム博士はライアーの生みの親プラハトと共にライアーの可能性を追求し，彼から直接その使命を受け継いだ第一世代である。そして，この研修会を企画したスザンネ・ハインツや近年ライアーの指導ために来日しているヴォルフガング・フリーベはクニイーリム博士を初めとする第一世代に学んだ第二世代である。「ライアの会」が直系のライアー奏者たちとつながりをもったことはライアー演奏に対する構えや意識の深さを含めてアンサンブル演奏にも影響を与えることになった。しかし残念なことに，1999年，クニイーリム博士は体調を崩され不帰の客となった。したがって直接クニイーリム博士に学ぶことができた日本人は，この時の研修会の参加者が最後となったのである。

このドイツ研修の後，泉本は1997年3月27・28日に八王子セミナーハウスで開催したライアー講習会に講師としてハインツとフリーベの両者を招聘した。また1999年3月29日から30

日には文京区の同仁キリスト教会においてフリーベのライアー研修会，2002年3月26日と27日にはやはり同仁キリスト教会においてハインツのライアー研修会を開催している。とりわけ2002年のハインツの研修会の最後は総勢約50人によるライアーの小コンサートを行ったが，日本でこれだけの人数がコンサートでライアーを響かせたのは歴史上初めてのことであった。1987年に5・6名で「ライアをひく会」がスタートした頃は，ほとんどライアー演奏をする者がいなかったことを考えると隔世の感がある。

2002年には，ハインツの企画により「東京ライアーアンサンブル」と「横浜ライアーの会」にとって第2回目のドイツ研修が実現した。この時，クリスチャン・ギールシュ編曲の難曲「スカボロフェアー」[34] をライアー奏者で作曲家のギールシュ自身から直接指導を受ける機会を得ている。かつライアーの世界ではビルトゥオーゾの誉れ高いマーティン・トビアセンの素晴らしい演奏を聴く機会も設定されていた。同研修の最後にはグレーベンツェルやローゼンハイムにおいて参加者15名によるコンサートも開催され，貴重かつ意義深い研修であった。

泉本は，ライアーの研修会の他に，1996年にスザンネの『ライアー演奏の入門』[35] を邦訳し，2002年にはミュンヘンのシュタイナー学校の音楽教師だったフェリチタス・ムーヘ（1906～1984）の著書『シュタイナー学校の音楽の授業』[36] を共訳している。

さて現在，泉本と並んで，日本のライアー活動にとって欠かすことができない存在なのが吉良創である。吉良は，1988年から4年間ドイツに留学してシュタイナーの音楽教育やライアーを学び，ヴィッテンのヴァルドルフ幼稚園教師養成ゼミナールを修了した。帰国後は東京で南沢シュタイナー子ども園を担当し，泉本と共にコンサートを行う一方，自らのシュタイナー教育の実践を著書『シュタイナー教育～おもちゃと遊び』[37]，『シュタイナー教育の音と音楽～静けさのおおいの中で』[38] に著している。この2冊の著書の中には，これまでほとんど書かれることがなかったキンダー・ハープやライアーはもとより，シュタイナー教育で使われている様々な楽器も紹介されている。彼はまた「聴く」ことの大切さとPAによる音量の拡大やライアーを録音することが増えてきた昨今の問題性や生音重視の必要性などについても論じている。

泉本と吉良は，日本におけるライアーの望ましい発展にとって，ライアー演奏の指導者の養成が焦眉の急であるとの認識に立ち，『千と千尋の神隠し』以来さまざまな問題が生じてきた日本のライアー状況を立て直すべく，2002年には「日本ライアー響会」を設立した。「日本ライアー響会」は，現在のところ，ライアーの指導者を対象として，定期的に演奏のための講座を開催しているが，今後，ライアーに関する翻訳の出版も手がけていく方針ということである。

(3) 現在の日本のライアー事情

泉本や吉良に指導を受けた人や欧米のシュタイナー教員養成コースを修了した人の他にも弾き語りなどで個人的に表現を工夫するなど，近年，日本ではライアーを活用して個人やグループによる様々な音楽活動が展開され始めてきている。

個人の活動としては，既にメジャーになった木村弓がいる。彼女は最初，泉本信子に数回個人レッスンを受け，また泉本主宰のライアー研修会にも参加していたが，間もなく自分の歌の作品に主にコードで伴奏をつけるという独自のスタイルを生み出した。兼ねてから癒しや祈りにかかわる歌に関心をもってコンサート活動を行っていたが，アニメ映画がヒットした後は歌謡界のアーティストとしてコンサートやCDによる活発な音楽活動を行っている。

今井千晶は，楽譜を書かずにその時々に自分なりのテーマを決めてライアーにのせて即興的

に歌いながら自分の作品を創るという独自の音楽づくりを行っている。シュタイナーについては，考え方に共鳴できる部分もあるが特に強い関心はなく，むしろ自分の表現ができる楽器としてライアーに出会えたことに喜びを感じているという[39]。

青木由有子は，音楽や朗読によるセラピーを提唱しているリラ研究グループ自然音楽研究所のソリストである。この研究所の活動には，彼女の歌のCDの特殊な効果の強調や心霊主義とのつながりなど疑問な部分が多い。彼女自身も自分は自然界と会話可能であり，自分の音楽は自動書記のように自然に生まれるというような発言が見られる[40]。

エネルシアは，音楽療法を中心にしてオカリナなどの楽器とのコラボレーションによる音楽活動を行っている。

ここに列挙した個人で演奏活動を行っている人々は，特にシュタイナー思想との関連はない。またいずれもが自分のライアー演奏のCDを出している。ライアーの音は生音とCDの音との落差が激しく，CDの音はライアーの音の再現にはなりにくいことから，ライアー奏者の間でCD作成の是非は静かな議論の対象となっている。因みに国際的見てもライアー演奏のCD化は極めて稀である[41]。

彼らのライアーの入手先は，全て輸入元である泉本幸一の東京アンゲルスムーシカである。ライアー購入者を限定できないとはいえ，妻の信子が人生をかけて望ましいライアー普及をめざしてきたプロセスを考えると，こうした展開に皮肉な因縁を感じないではいられない。

ライアー・グループの活動に着目するならば，「東京ライアーアンサンブル」や姉妹グループである「横浜ライアーの会」，吉良創が指導している市川のライアーグループ，新潟の「アンサンブル・ムーサ」などは，本格的な演奏活動をめざしているといえよう。

この他にも「東京ライアーアンサンブル」のメンバーの一人が那須で主宰している「つくばライアー響きの会」，広島の「ララの会」，そして岩手，葉山，京都，愛知，福岡などにもライアーのアンサンブルグループがある。これ以外にも急激に増えている全国のシュタイナー研究会の中には，目的や演奏レベルが違う多様なライアー演奏のグループがあると思われるが，全国に散在するこれらのグループの数と日常的な活動を正確に把握するのは難しい。特に，木村弓がかかわった映画公開以降は，個人的な興味からライアー購入者が急増しているため，全体像が把握しきれなくなっている。一方，近年は欧米でライアーを学んできた人が次第に帰国してきており，今や日本はその是非はともかくとしてライアー所有者とライアーのCDの多い国の1つになっている。

4 ライアー国際大会

(1) 第1回ライアー国際大会

世界のライアー関係者が集まって国際大会を開催しようという気運は90年代の後半から高まり，1998年頃からほぼ2年間の準備期間の末，2000年5月31日から6月4日にかけてドイツのハンブルグで第1回ライアー国際大会（Lyre 2000 International Congress in Hamburg）が実現した。1926年にE・プラハトとR・ゲルトナーが共同でライアーをこの世に誕生させてから74年の歳月を経て，ライアーは島国日本でも演奏者を生み出し，2000年には世界中のライアー関係者が一堂に会するというこの第1回国際大会は歴史的に極めて意義深いものであった。またこの第1回ライアー国際大会には日本から約10名が参加しており，これまでの日本の

ライアー事情を考えると感慨深いものがある。

この第1回目の国際大会は，20ヶ国300人以上が参加する程の盛会であり，内容的にも充実したものであった。この第1回ライアー国際大会では，朝の始まり10分間に参加各国が担当する短いワークショップの時間が設定されていた。イギルスやドイツは手拍子や足拍子によるリズム音楽のワークショップ，アメリカは声を使ったワークショップ，スペインはフラメンコの簡単なリズムのワークショップ，そして日本は吉良創のリードで「なべなべそこぬけ」を楽しませたという報告がある[42]。大会日程としては午前午後の全体による講演や演奏以外に，午前に11の演奏コース，午後にも複数のワークショップが開かれ，参加者は事前に申し込んだコースに参加する形態になっていた。

各国のグループによる演奏では，約10名の日本のグループの演奏は，予定していた会場以外にもアンコール演奏を依頼されるほど好評だったようである。全体による講演や演奏以外に，午前に11の演奏コース，午後にも複数のワークショップが開かれ，参加者は事前に申し込んだコースに参加するという研修会だった。この日程はほぼ第2回の国際大会にも受け継がれた。

キリスト者共同体の司祭で作曲家でもあるローター・ロイプケが自らの講演で参加者に問いかけた「ライアーは楽器ですか？，楽器以上のものではないですか？」の言葉は，この大会に参加したライアー奏者たちに自らへの深い問いとして伝わったようである[43]。

第1回の大会では，初めて世界中のライアー製作者が自分のライアーを携えて参加するという企画も目玉の一つだった。日本のライアー奏者になじみ深いゲルトナーやコロイのライアーを初めとして，ザーレム・ライアー（ドイツ），ゲーベル・ライアー（ドイツ），アントン・ライアー（チェコ），マリーライト・ライアー（オーストラリア），ケルティック・ライアー（アイルランド），ジョン・ブライアン・ライアー（イングランド），アウリス・ライアー（スエーデン），この他アルゼンチンのライアーなどもあり，3つの教室がライアーで埋まっていた[44]。

第1回ライアー国際大会終了時には，第2回ライアー国際大会の開催は2005年マドリッドの予定であった。しかし実際には第2回ライアー国際大会はアメリカ側の積極的な申し出によって2003年の夏にアメリカで開催される運びとなった。

(2) 第2回ライアー国際大会

①大会の概要

2003年7月20日から26日の1週間，アメリカ北東部にある町キーン（keene）のヴァルドルフ学校で第2回ライアー国際大会が開催された。第2回ライアー国際大会（Lyre 2003： World Congress）はイラク戦争などの世界情勢が不穏に揺れ，テロの危険が残るアメリカが開催国だったため，一時開催が危ぶまれた。しかしアメリカ，カナダ，ドイツ，日本，スェーデン，アイルランド，オランダ，イスラエル，アイルランド，スイス，カナダ，イギリス，アルメニア，ブラジル，ノルウェー，オーストラリアの15カ国122名の参加者がライアーの演奏と鑑賞を通じて，人間や音楽について考え合うことができた充実した会議であった。

この第2回大会のテーマとして，“Building Community Through Music”が掲げられていた。午前中は，開催国アメリカのライアー奏者を中心に全体で基本の音（人智学では曜日毎に基本の音が決まっている）を意識した音階練習やアイルランドの作曲家ジョン・ビリングのリードによる短い基本練習を行い，午前の休憩後は，10コースに分れて各自が希望した講師によるライアーグループで90分間の練習を行う。昼食の後は，小さなイベントや全員による最終日

の夜のコンサートに向けての合同練習などがあり，夕食前の90分間は，選択できる“Community Building Workshops（共同体づくりのためのワークショップ）”の10のコースがグループ毎に3日間実施された。このような一日の日程は，基本的には第1回大会を踏襲している。

午前と午後の2種類のグループ活動（各10コース）のタイトルは以下の通りである。

〈午前〉 Lyre Groups	〈講師名〉
1. ライアー・アンサンブル（初級）	Margo Ketchum
2. アメリカの音楽（初・中級）	Samantha Embrey
3. 歌を伴うA・キュンストラーとJ・クニーリムの音楽（中級）	Maria Hollander
4. 身体表現を伴うアンサンブル・グループ（中級）	Sussane Heinz
5. 歌とライアー（中級）	Diane Ingraham
6. アンサンブルで演奏（中・上級）	Floortje Bedaux
7. ケルト音楽（全級）	John Billing
8. アンサンブルで演奏（全級）	Hajime Kira
9. 耳と心による学び（全級）	Peter Rebbe
10. ライアーアンサンブルのために編曲された中心的な音楽	John Clark
〈午後〉 Comminity Building Workshops	
1. 色彩と音による共同体づくり	Robin Elliott
2. ライアーと他の楽器による祭典の挙行	Johanna Spalinger
3. 共同体の推進力としてのライアーづくり	Gumdolf Kühn
4. ライアーによる共同体形成者としてのユリウス・クニイーリム	Gerhard Beilharz
5. 即興による共同体づくり	Andrea Pronto
6. 音楽の基本的な要素による共同体づくり	Christian Giersh
7. 共に働く時のエーテル体の質の認識：他のレベルとの交流	Marijke Vreeken
8. 音楽と共同体に自由なエーテル体を取り戻すこと ～古代ギリシア音階の導入	Thomas Adam
9. 基石の瞑想の言葉に対するアンソニー・タフの音楽についての取り組み	Mary Lynn Channer
10. 共同体におけるライアーによる音楽づくり	Anna Cooper

午前の8コースに日本の吉良創が欧米の講師と共に日本人講師として名前を連ねたことは，注目に価する。大会での演奏活動やワークショップの様子の一端を伝えるために，筆者が参加したグループの活動について具体的に紹介したい。

②スザンネ・ハインツによるライアー演奏活動

午前中のライアー演奏は，筆者が師事しているスザンネ・ハインツの「4. 身体表現を伴うアンサンブル・グループ（中級）」に参加した。

ハインツは，近年，音楽と身体の関係に関心をもつ一方，演奏法についても独自の世界を構築してきている。今回の演奏指導においても，共に演奏する人との関わりを深める動きや自分自身のバランスを整える動きのエクササイズが組まれていた。いくつか例を挙げよう。

・円になって隣の人と手を会わせて左右に揺れる。次第に揺れる速さを変化させる。

・1人で目を閉じて左右に揺れたり，目を閉じて片足で立ったりする。
・それぞれが何ももたずにライアーを弾いているような気分で手の動きを行う。
・演奏曲目の1つであるパバーヌのステップを踏む。
・2人組になり1人が支えを信頼して後ろに倒れ，もう1人がそれを背中側から支える。

7月21日の月曜日から24日の木曜日にかけて11時から12時半までの90分の練習時間中，常に15分間を4回，演奏前の15分から20分程度のムーブメントを行い，お互いの身体と心を柔軟に解放することにより，アンサンブル演奏の原則であるお互いの音楽的な呼吸を感じ，音を聴き合う力が高まったようであった。また次のような基本練習と楽曲の練習を行った。

・パバーヌのリズムを使ったフィンガーリングと指を離すタイミング
・親指を多用するフンガーリング
・派生音や左手の練習
・目を閉じてさまざまな調性でいくつかの音型を弾く練習
・つまむようにしてクリアーな音を出す新しい奏法
・フランスの短いポピュラーな教会音楽であるティーズィー（Teazy）の練習
・「Pavane」（Peter Warlock 作曲，Sussane Heinz 編曲）の練習
・「Canzon “Sol-sol-la-sol-fa-mi”」（Giovanni Gabrieli 作曲）の練習

以上がハイツのグループで行ったことの概略である。共同で音楽を紡ぎ出すプロセスで，さりげなく語るハインツの言葉の端々からも音楽を学ぶことができた。

各コースの4日間の継続練習の成果の発表と鑑賞は，最終日の前夜，会場のヴァルドルフ学校内で行われた。各コースの聴き応えのある発表の中にブルースの演奏があったことは，ライアーの可能性を新たに認識させられる出来事であった。

③アンドレア・プロントのワークショップ

午後のアンドレア・プロントの「5. 即興による共同体づくり」では次のような活動を行った。

〈ライアーをもたないで〉

・「拡散と縮小」～全員が中央に接近してから外側に広がる。これを緩急のテンポ両方で行う。
・「全体での交差」～円になって全員が中央に接近して，カオス状態になりながらもスムーズにぶつからないように回転しながら反対側に移動する。
・「向い側の人と交差」～向かい側に立っている相手と交差する。次に相手の動きを模倣して交差したり，交差するときに自分の名前を伝えたりする。
・「名前回し」～円になってそれぞれの名前を隣に言って回していく。
・「手拍子回し」～円になって隣に手拍子を回す。同じテンポからさまざまなテンポで回す。途中で「山を創る，スパイラルな感じにする」などのイメージをもちながら行う。
・真っ直ぐに立って，爪先と踵の組み合わせによるパターン化された動きを行う。
・基本のリズムパターンを決めて手拍子と足拍子を行う。これを1人1音符を担当して円の中で回す。しかし円からの出入りは自由であり，抜けた人のところは飛ばしてリズム型を保つ。
・円陣の人々で，1拍目を強調しながら，いろいろな拍子（4/4, 5/4, 7/4 など）を創り出す。円からの出入りは自由であり，1拍目を強調して拍子をキープし続ける。

〈ライアーをもって〉

・身体表現による指揮で即興表現を行う。最初はプロントが行い，慣れたらばメンバーが行う。（例：音高・強弱＝ライアーのグリサンドやトレモロを弾くような手の動きの表現，音止め＝

弦を押さえる動作，音を残す＝両手を後ろに回す動作）
・ライアーを使って好きな音による1音回しや2人組による自由な対話を行う。
・ドリアンスケールのうち1人1音分担した音を鳴らし続けて音楽にしていく。
・d'e'a' の音を弾く3人が中央でオスティナートを弾き，周りで全員が即興演奏を行う。
・全員，隣同士の2人組，そしてランダムに相手を決めてライアーの下から上へのグリッサンドによって波を創って送り，また送り返す
・1人4・5音で創った音型を回す。
・1人が伴奏で1人がメロディーを分担して，隣人と2人による即興表現を行う。
・4グループで各自の好きな音による対話の音楽をつくり，各グループの対話をつなぐためにゴング，フィンガーシンバル，トライアングルを鳴らす。
・最後は全員による自由な即興演奏を行う。

プロントのワークショップはライアーを使う即興以外は，筆者が提唱している創造的な音楽あそびと同じような活動である。あえて違いをいうならばここでの活動は，明確に共同体づくりという目標の下に行われている活動だということである。

ところでセレモニーとしての閉会式は最終日の午後に行われたが，今回の大会の実質的な締めくくりは，最終日の夜にキーン市内のホールにおける公開コンサートであった。

コンサートの第1部は，キーンのヴァルドルフ学校の子どもたちによるライアー演奏からスタートして，日本のグループによる演奏，ジョン・ビリング，スザンネ・ハインツ，クリスチアン・ギールシュら講師陣の演奏に続き，最後はケルティック・ライアー・オーケストラの演奏が行われた。第2部は，講師陣を中心とする約30名のインターナショナル・ライアー・アンサンブルによるモーツァルトの作品とアメリカ在住の作曲家C・A・リンデンベルクによる大会記念楽曲の演奏であった。前回の第1回に引き続いてリンデンベルクによって作曲された記念楽曲は，詩篇104編による作品「FROM PSALM 104～Music for Lyre Chorus and Voice with Bells and Flutes」である[45]。

②第2回ライアー国際大会における講演やディカッション

2003年7月20日の大会初日には，大会記念楽曲の作曲者リンデンベルクによる開会の辞と開催国アメリカのライアーグループによる演奏があった。リンデンベルクは，創造性はコミュニケーションの基盤であることを強調すると共に，シュタイナーの次の言葉を引用しながら第2回大会が厳しい世界情勢の中で無事に開催できたことを称える講演を行った。

神の叡智が世界に秩序をもたらし　私にも秩序をもたらす　私は秩序の中に生きる
神の愛が世界を温め　その温もりが私の心を温める　私はその中で呼吸する
神の力が世界を支え動かす　それは私の体を支え動かす　私はその中で思考する

Rudolf Steiner

3日目の7月22日の夜には作曲家でキリスト者共同体の司祭でもあるローター・ロイプケの講演が行われた。彼が聖書の中の「サムエル記」に出てくる話を引き合いに出しながら，ライアー奏者に必要な精神性について語った中で，とりわけ次の言葉が印象的なものであった。

「真に深い静寂の中で初めて何かがわき上がってくるものであるが，自分の中に静寂を生み出すのは難しい。ライアー奏者が実際の演奏に必要のない動きをしている場合は，音楽そのものの表現とは言えない。最終的にはいろいろなものが削ぎ取られ凝縮された種子に中には，次

に成長する力が潜在している。この種子と同様，人間が意識下で深い泉の中から水を汲むように，潜在意識の中に多くのものがある。種子が全宇宙から伝わってきた外の光の力を借りて成長するように，人間の潜在能力が発揮されるためには，自分のためだけの興味ではなく，外の共同体を見て誰と一緒に活動するのかということが大切である。自分の欲ではなく外に向かう無償の愛が大切なのである。」

今回の会議では，ザーレム・ライアーの製作者ホルスト・ニーダーの講演を契機に，日本にかかわる予定外の議論の時間が設定された。彼は講演の中で，きわめて微妙なニュアンスで，『千と千尋の神隠し』の映画が公開されて以来，日本からのEメールなどによる照会が引きも切らず，ライアー製作者たちが困惑している旨の話題を出した。この講演終了直後，日本人メンバーから日本の状況が話題になっているにもかかわらず日本語の通訳を立てないのは問題だとの厳しい指摘があった。この時点まで英語とドイツ語の通訳者が正面に立ち，同時通訳していたが，日本人は海外居住者による通訳を囲んで密やかに情報の確認をしていた。急遽，この問題に関する臨時討議の時間が翌朝の全体会に設定された。日本側からは，現在，日本におけるライアー界の中心的存在である泉本信子，吉良創の両氏が発言した。

泉本信子は，ニーダーが指摘したのはライアーに関する情報をもたない映画の影響を受けた人々のことであり，本大会に出席しているような地道にライアーを深めている人々とは違うと主張した。また映画の公開以来，ライアーがその本来の姿から離れて一時的な興味の対象になっている憂うべき現状やライアーの指導者不足による弊害についても語り，2002年に指導者養成のための「ライアー響会」を設立したことなどについて説明した。

一方，吉良創は，映画だけではなく，ヒーリング・ミュージックとしてCDを出したりコンサートを開いたりする人々が増えてきており，ライアーが日本に突然広がったということはライアー自身にとっては楽器としての可能性を開くチャンスの1つかも知れないとも語った。

この時，アイルランドのメンバーからも，同国でも似たような現象が見られることが説明された。予定外の議題であったため短い討議時間ではあったが，ライアー製作者も議論に加わり，日本固有の問題としてではなくライアーの未来に関する共通課題として議論が交わされた。この時司会を担当したアイルランド共和国のジョン・クラークは，ライアーの未来は人間の意志でコントロールできるものではないとしながら，ライアー奏者の考えるべき課題は次の5点であるとまとめて，「深く聴く」ことから答えが見いだせるかも知れないと付言した。

・将来どうなるのかというライアーの一般的な未来
・ライアーは守らなくてはならない楽器なのか
・もし守らなければならないとしたらどのように守るべきなのか
・ライアーで世界中の架け橋をどのように創るのか
・ライアーはわれわれが守るべきなのか，ライアーの精神自体が自らを守るのを見守るべきか

このような議論は，ライアーをいわゆる楽器の1つとしてのみ見た時には，奇異な感じを抱くかも知れない。しかしながら第1回国際大会の時にも，ローター・ロイプケが自身の講演の中で「ライアーは楽器ですか？，楽器以上のものではないですか？」と問いかけている。ライアー奏者にとってライアーは単なる楽器としての存在超えて，自分と外の世界をつなぐ架け橋としての存在でもある。またいわゆる演奏テクニックを追究する他の楽器とは違う，より精神的な自己発見そのものを目的とする楽器ともいえるのである。

いずれにしても日本のライアー状況をめぐるこの議論を契機に，本大会では堂々と立ち上

がって日本語の通訳が行われるようになった。これはライアーの国際大会に限らず，まさに欧米中心の国際大会の在り方そのものを考えさせられる一幕でもあった。

ところで次回の大会の開催国として一番希望が多かったのは日本であった。東洋の「日出ずる国」に対する世界のライアー仲間の強い関心に驚かされたが，国内に多くの問題を抱えている日本のメンバーは，2年後の国際大会開催は時期尚早であるとの立場を崩すことはなかった。次回は，大会開催を切望しているアイルランドが開催国になる可能性が強いようである。

結び

ライアーが日本に導入されてからほぼ35年の歳月が流れている。この間，日本のライアー事情も刻々と変化してきている。木村弓の活動を初めとして，シュタイナー思想とは無関係に弾き語りの伴奏楽器として便利にライアーを活用するソロ活動が増えてきている。ライアーのソロ活動には個性的な演奏スタイルや宗教色の強い演奏活動に直結させているようなケースも少なくない。何故，ライアーは出会えてうれしい楽器として，様々な人や分野に受け入れられ歓迎されるのだろうか。その魅力は一体どこから醸し出されているのだろうか。出会うと魅了されるライアーという楽器自体がもつ不可解な底知れぬ魅力と神秘性を痛感せざるを得ない。

いずれにしても1975年に子安美知子が『ミュンヘンの小学生』を出版して以来，日本におけるシュタイナー教育の波は着実に大きなものになってきている。同時に，1981年にフィント・アイゼンによって初めて日本に持ち込まれたライアーは，この楽器に魅せられた個人の努力によって様々な形で次第に日本中に広がり，世界的に見ても日本は所有台数の多い国の1つとなった。2000年からライアーの国際大会が開催されるようになり，日本のライアー奏者は欧米のライアー奏者と共に肩を並べて参加できるほどに成長してきた。しかしながら日本におけるライアーの広がりは主に演奏用の楽器としての広がりであり，シュタイナー教育の現場やその思想の根幹にある治療教育の現場における広がりという面では特筆できるような活動が見受けられないのが実情である。ドイツやアメリカの優れたライアー奏者には，ヴァルドルフ学校や施設，教員養成学校や自由音楽学校などで音楽療法にかかわっている教師陣が多い。

日本でライアーが知られるようになったといっても，オーケストラの楽器などと比べると相変わらずマイナーな楽器である。一時のブームも既に下火になってきており，現時点では今後のライアーの行方は予測しがたい。

日本におけるライアーの導入と広がりの変遷を振り返ってライアーの未来を考える時，筆者自身が「自分にとってライアーとは何なのか」という極めて本質的な問いに向き合いながら，ライアーそれ自体に潜在する力があらゆる場で新たな出会いを生みながら開花していく可能性を秘めた楽器として，今しばらくはその行方を静観せざるを得ないと痛感している。

本稿は，テーマの特性上，関連文献が僅少であり，また生きた証言なしでは執筆することは不可能であった。多くの方々にお話を伺ったが，特にルドルフ・シュタイナー教育講座およびルドルフ・シュタイナー教育海外ゼミナールに関する貴重な資料を提供して下さった高橋弘子と二瓶繁の両氏に心から謝辞を述べたい。

〈註および参考文献〉

1) 黒沢隆朝著『図解世界楽器大事典』雄山閣，1984年，315-319頁参照。
2) ルドルフ・シュタイナー著，西川隆範訳『音楽の本質と人間の音体験』イザラ書房，1994年，152頁。
3) 前掲書2)，80頁。なおこの言葉は，1923年3月の「人間における音楽体験」と題する講義の中で，シュタイナーが語ったものである。
4) 高橋巌監修の『オイリュトミー』(泰流社，1986年，pp. 28-30) によると，後のシュタイナーの妻マリー・フォン・ジーフェルスがこの新しい身体芸術に命名したといわれる。「オイリュトミー」という言葉は，「オイ（良い）とリトモス（リズム）というギリシア語に基づき，調和を特徴とする動きを意味する。
5) ライアー誕生時の様子については，『Die Leier』(Maria Hollander, Peter Rebbe 編，Freiburger Graphische Betriebe, 1996) に，E・プラハト（pp. 11-15）とL・ゲルトナー（pp. 16-19）の両者の文章が掲載されている。
6) ライアーと治療教育との関係については，ユリ・ユリアンスの「治療教育におけるライア」(『シュタイナー幼児教育手帖第4号』創林社，1986年，74-81頁）参照。
7) ルドルフ・シュタイナー著，高橋巌訳『治療教育講義』角川書店，1988年，8頁。
8) シュタイナーは20代の頃，重度の水頭症を患っていたシュペヒト家の四男エルンストの家庭教師を勤め，結果的にエルンストを大学に進学して医者として働けるまでに成長させている。この時の体験がシュタイナー教育哲学の原点となっている。
9) これらの弦鳴楽器の系統については，『楽器』(マール社，ダイヤグラムグループ編，皆川達夫監修，1992年，164-165頁）を参照されたい。
10) 泉本幸一の本業は，楽器販売・メンテナンス業であるが，1986年に輸入元になったのを機に東京アンゲルスムーシカという社名でライアーを扱ってきている。なお泉本氏からの情報は2003年8月20日に行った直接インタビューによるものである。
11) 子安美知子著『魂の発見—シュタイナー学校の芸術教育—』音楽之友社，1981年
12) 前掲書11)，30頁。
13) 子安美知子著『ミュンヘンの小学生—娘が学んだシュタイナー学校』中央公論社，中公新書416，1975年。
14) 一柳慧著『音を聴く—音楽の明日を考える』岩波書店，1984年，8頁。
15) 前掲書14)，9頁。
16) 同上，10頁。
17) 高橋夫妻のこの時期の活動については，当時から高橋の講座の企画運営を担当していた二瓶繁に依頼して1970年代から現在に至るまでの貴重な記録を入手した。また1981年の1月から東京と京都でシュタイナー教育講座が開催されたことについては，高橋弘子がシュミット・ブラバンド，高橋巌，ヨハネス・シュナイダー著『シュタイナー教育と子どもの暴力』(創林社，1986年）のあとがき（172頁）に書いている。
18) 2003年9月8日の電話取材時に得た情報である。
19) 季刊『シュタイナー幼児教育手帖第2号』創林社，1985年，64頁参照。ゲルトナー宛の楽器注文の手紙は高橋弘子からコピーを入手できた。高橋弘子によると1980年のゼミナールのライアー演奏の奏者は，ユリウス・クニーリムだったという。なおこの後，翌年にかけて高橋は，国内のシュタイナー教育ゼミナールのために，ユリ・ユリアンスの「治療教育におけるライ

ア」，クニーリムの「ライアの演奏技法」という資料の他にエリザベス・スロテマーカー著『ライア音楽』を訳出している。演奏法の説明を含む64頁にわたる楽譜集『ライア音楽』は，製本された小冊子ではあるが，日本に初めて紹介されたライアーの曲集である。

20) 1982年の第8回と1983年の第10回ルドルフ・シュタイナー教育ゼミナールの案内用チラシは，当時これに参加していた高木芙二子から入手することができた。

21) ベーセが日本に初めてコロイのライアーを持ち込んだことは高橋弘子や二瓶繁からも情報を得ている。なお2001年のミュンヘンにおける「東京ライアーアンサンブル」の研修に参加していたベーゼは，偶然にも筆者の隣席で演奏しており個人的に彼の音楽療法について伺う機会を得ることができた。彼は現在も熱心にライアーによる音楽療法に従事している。

22) Albert O. Böse, Vorwort, Akira Nakagomi, Musik für Leier (1983-1985), Norddeutscher Arbeitskreis für Leierspiel, Hannover 1996

23) 2003年8月に電話取材によって当時の中込をよく知る二瓶繁から得た情報である。

24) 中込晃「はるかなるソフィアの音楽ふたたび～ドイツ・ヴァルドルフ学校の音楽教育を訪ねて～」，音楽之友社『教育音楽中学・高校版』1986年4月号～1987年3月号。この連載の『教育音楽中学・高校版』(1986年6月号，音楽之友社，60頁）に中込晃は日本で初めてライアーを紹介したのはフィント・アイゼン先生であることを明記している。

25) 中込晃が第11回ルドルフ・シュタイナー海外ゼミナールに参加していたことは，筆者が入手したこの時のホテルのルーミングリストに特別班「在ドイツ」として彼の名前が記載されていたことから確認した。

26) かつて中込にライアーの指導を受けた経験のある坂田ゆかりに対するインタビューは，2002年4月14日に行った。

27) 泉本信子編著『Leier ライアの本』(東京アンゲルスムーシカ発行，非売品，全24頁)，1986年

28) 泉本信子と友人関係にあった筆者は，楽器の音色に魅せられて第2回目（3月）のからこの「ライアをひく会」に参加している。

29) スザンネ・ハインツは，1980年から83年の4年間，自由音楽学校でライアーを学び，2年間音楽療法士を経験した後ライアー指導やコンサート活動を行い，93年からは自由音楽学校の教師陣に加えられた。スザンネはドイツにおける筆者の師でもある。

30) 藤田恵子は，ドイツのヴァルドルフ学校における初めての日本人音楽教師である。中込晃のフランクフルト滞在時にも彼に協力していた。

31) 「ライアの会」のように当初，「ライアー」を「ライア」と呼称していたが，会の名前はそのままだが実際の楽器については1994年頃からドイツ後の発音どおりに「ライアー」と語尾を伸ばす表記になった。

32) 泉本は1997年，1999年，2002年の3回にわたってスザンネ・ハインツ，ヴォルフガング・フリーベなどドイツのライアー奏者と日本でコンサートを開催した。また「東京ライアーアンサンブル」のメンバーの高木，島崎と組んでトリオでのコンサート活動を1997年から2000年までの間に8回行っている。

33) プラハトが自らの使命をクニイーリム博士に託したことなどについては，前掲書6）のユリ・ユアンス「治療教育におけるライア」(74-81頁）参照。

34) Christian Giersch, Scarborough Fair～Wege zu einer alten Melodie, für Leiern in chorischer Besetzung, Norddeutscher Arbeitskreis für Leierspil, Hannover 1995.

35) スザンネ・ハインツ著，泉本信子訳『ライアー演奏の入門』(原題 Einführung in das Leier-

spiel, 1995）, 音楽之友社, 1996年

36） フェリチタス・ムーヘ著，泉本信子・中山やちよ訳『シュタイナー学校の音楽の授業』（Felicitas Muche, WIR LERNEN NOTEN: HÖRENDE DISZIPLIN 1.2.3. SCHULJAHR, 1982），音楽之友社，2002年

37） 吉良創著『シュタイナー教育〜おもちゃと遊び』学習研究社，2001年

38） 吉良創著『シュタイナー教育の音と音楽〜静けさのおおいの中で』学習研究社，2002年

39） 今井千晶には2003年9月3日に電話にてインタビューを行った。

40） 青木由有子は，既に12枚のCDを出しており，彼女のリラ・ヴォイスによるCDがパソコン対策，不眠症，法事・祖先の癒し，またペットの癒しにまで効果があるという。さらに癒しの効能のある朗読として宮沢賢治作品の朗読をCD化していることにも疑問を感じる。

41） ドイツで出ているライアーのCD例としては，エルフリード・ケンプターとヴィルバルト・ヘルビッヒによる2002年作成の「Leier-Music〜rischs & Klassischrs」（D88630）がある。また北アイルランド・モーングランジュ・キャンプヒルコミュニティーでは，2000年に「A New Perspective」（MG2001），2001年に「In The Company of Friends」（MG2002）というケルティック・ライアーとアイルランドの民族楽器によるCDを出している。

42） 泉本信子「ライアーの国際会議　ドイツ・ハンブルグ」，那須シュタイナーカモミールの会会報「カモミール」第12号2000秋，6-8頁参照。

43） 前掲42），8頁。

44） 吉良創「Lyre 2000 International Congress in Hamburg　ライアー世界大会に参加して」南沢シュタイナー子ども園，通信15巻June 2000，10-12頁参照。

45） 約30名のインターナショナル・ライアーグループによる大会記念楽曲の演奏には，筆者を含む6名の日本人が参加した。なお，詩篇は旧約聖書の一部であり，古代ヘブライ人が神を称えた歌150編を集めたものである。「詩篇104」の最後は，「どうか罪ある者がこの地から全て失せ，主に逆らう者がもはや跡を絶つように。私の魂よ，主をたたえよ。ハレルヤ」と締めくくっている。